凄惨な歴史を繰り返さぬよう

核の恐ろしさ語り伝える

講談師・田辺一乃さんに聞く
福竜丸の数奇な航跡

先月2日から公開中の映画『ゴジラvsコング』が大人気らしい。そんなゴジラシリーズの第1作目をネタにした『ゴジラ誕生』や、被曝したマグロ漁船を擬人化した『第五福竜丸』などの創作講談を演じる、講談師の田辺一乃（かずの）さんにお話をうかがいました。

講談独特のテンポとリズムで、ゴジラが国会議事堂をぶっ壊すシーンを演じてくれる田辺一乃さん。霞が関の人事院に20年以上勤務した後、2006年に高座デビューしたという異色の講談師。経歴を生かした講談調のセクハラ・パワハラ教育講演や、江戸東京野菜講談など地元関連の創作講談も多数。墨田区を拠点に活動し、月に１度は東向島の玉ノ井カフェ．で講談会を開催。

―『第五福竜丸』の講談を作られたきっかけは。

田辺さん　ご当地の講談を作ると地元から呼んでもらいやすいので、墨田区だと赤穂浪士とか防災など、やるからには調べに行くんですよ。で、江東区で何作ろうかなぁっていろいろ調べてるうちに1954年に太平洋・マーシャル諸島での水爆実験で被曝した第五福竜丸の展示館があると知りました。最初は展示館を建てる市民運動を講談にしようと思っていたんですが、福竜丸だけ被曝したわけじゃないということが分かりました。マグロが回遊している間に被曝して、それを捕ってきた船がやっぱり偏見を受けたりとか、マグロは全部捨てなきゃいけなかったりとか。日本中大変だったんだって聞いて、じゃあそこから始めよう、と。

―けっこう手間がかかっているのですね。

田辺さん　高校時代の担任の先生に、展示館の館長さんを紹介してもらって。ネタを作ると職員の皆さんの前でやって、細かいところをチェックしてもらったりして。

やはり、結婚できなかったなどの風評被害があって被害を受けた船員さんにも、もう語ってほしくない人もいるのが現状で。あと、それを語るといろんな産業が立ち行かなくなるわけですね、原発やめましょうみたいに。なので数字を絶対に一つも間違えないでくださいって言われたんです。そこで間違うと、「ほらここで違うことを言ってるから」って。「キノコ雲上がったと言わないでください、1回目の時にはキノコ雲になってないです」って。

フィギュアがきっかけで
ゴジラ講談が誕生

―ゴジラとの関係は。

田辺さん　2014年に続けて作りました。『第五福竜丸』やると重たいんですよ、終わった後が。で、続けて『ゴジラ誕生』をやるとちょっと皆がラクになるので。

きっかけは、展示館に何回か通ううちにゴジラのフィギュアがあるのに気づいて、「なんでゴジラ飾ってるの」って。それでゴジラの1作目が福竜丸の事件が元で作られたことを知りました。「ああ、だから放射能吐くんだ」と。

―やはり綿密な下調べをされたんですか。

田辺さん　ゴジラは映画を作る話なんですが、始めたらゴジラファンの人たちが「この人の話も入れてよ」って、わざわざ資料を届けに来てくれたりしてどんどん登場人物が増えちゃって。で、覚えられなかったんです（笑）。

それで、カンペ作ろうってことになり、フリップでカンペ作って。もう最後の方は、飛び出す絵本みたいに紙で小道具作ってあって、ゴジラはもういるだけで。「放射能を帯びた熱線を吐き、やがてゴジラは銀座へ（中略）うっかり時報をうったばっかりにうるさいとばかりに叩き落とされる服部時計店、和光の時計台。やがてゴジラは山手線を蹴散らかし、国会議事堂をぶっ潰し…」という具合に。

―今後もこれらのネタは演じ続けていくのですか。

田辺さん　今、200席超の講談を覚えていますが、これからも創作講談は演じ続けていきます。戦（いくさ）の講談とかも、戦いはやらない方がいいと思って演じているとお客さんと通じるところがあります。同様に、放射能の事故もない方がいいよねって。忘れるとまた起こしてしまうかもしれないので。

原水禁世界大会

闘いを積み重ねれば
核兵器廃絶の一歩になる

原水爆禁止世界大会へのスタディーツアーはコロナウイルスまん延のため中止となりましたが、代わりに8月6日オンラインでの視聴会を開催しました。

オンラインで集会を視聴する参加者

今年1月22日、核兵器禁止条約が発効しました。原水爆禁止2021年世界大会（以下原水禁大会）はその下での最初の大会となるわけですが、新型コロナウイルスの感染者が全国的に拡大している状況を考慮して、広島大会は完全オンラインでの開催となりました。

8月6日、けんせつプラザ東京で、原水禁大会のヒロシマデー集会のオンライン視聴会を開催。広島スタディーツアーへの参加予定者を対象に、13人の参加がありました。

視聴に先立って団長の石村副委員長から、「現地の空気感を味わえないのは残念ですが、核の拡散を許さず、原爆の悲劇を絶対に風化させないことを共有していきたい」とあいさつがありました。

第1回世界大会から核兵器禁止条約の発効まで66年間の歩みをたどったオープニング映像で集会は始まり、主催者報告、メッセージ紹介、被爆者・核被害者の訴えへと続きました。

国内からの発言では、7月14日に広島高裁判決が確定し、原告84人全員への被爆者健康手帳を交付をすることになった「黒い雨訴訟」について、広島県原爆被害者団体協議会の佐久間邦彦理事長から闘いの報告とともに、「このような闘いの積み重ねが核兵器廃絶への一歩となると思う」との訴えがありました。

最後に、「広島からのよびかけ」（主催者文書）が読み上げられ、閉会となりました。全参加者数は2948人でした。

視聴会参加者の感想（抜粋）

☆「合唱や詩の朗読などが織り込まれ、内容がバラエティーに富んでいて良かった」（荒幡紀子・小金井国分寺）

☆「核兵器禁止条約を、日本はなぜ批准しないのか。原爆一つで14万人という国民が命を落とし、今も苦しんでいる人々がたくさんいるのに」（君塚徳子・町田）

☆「特別企画の中で『平和を考える部活動』をしている高校1年生の方がいて、若い人の中でも平和を意識していることが、とてもうれしかったです」（相樂由美子・荒川）

☆「唯一の被爆国である日本は勇気をもって核兵器廃絶への行動を行なわなくてはいけない」（井澤典一・大田）

☆「悲劇が繰り返されぬよう核兵器廃絶の運動をし、黒い空ではなく、青い空を子どもたちに残したいと思います」（浜崎菜央子・中野）

荒川

投下されてから76年経過
「原爆と人間展」

パネル展示に見入る来場者の方々

【荒川・内装・増山國吉通信員】今年は広島、長崎に原爆が投下されてから76年が経過しました。

コロナの蔓延による緊急事態宣言と東京五輪が強行されたなか、原水爆禁止荒川協議会主催による「原爆と人間展」が、町屋文化センターで8月1日から3日まで開催されました。パネル展示とプロジェクターによる上映会が行なわれました。

日本は1月に発効した核兵器禁止条約に署名していません。7月14日に確定した「黒い雨訴訟」の広島高裁判決に対して、菅政権は上告せず原告の訴えを認める判断をしました。しかし、秋の総選挙を見すえた政治的判断だったことも否めません。

猛暑のなか、家族連れや夫婦で来ていただき、初日に延べ85人の来場がありました。

また、カンパ、感想文、折り鶴などにも協力していただきました。支部から会場設営や受付などに3人が参加しました。